

氏名(本籍)	小澤 秀子(高知県)
学位の種類	修士(看護学)
学位記番号	修士第 61 号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位論文題目	知的障害を受けた子どもを長期養育する母親の体験 - 関係性の視座からの質的分析 -

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	63	(ふりがな) 氏 名	おざわ ひさこ 小澤 秀子
修士論文題目	知的障害を受けた子どもを長期養育する母親の体験 —関係性の視座からの質的分析—		
<p>目的：知的障害を受けた子どもの母親が、どのような長期養育の体験をしてきたかについて、関係性の視座から明らかにする。</p> <p>方法：非構成的面接による質的記述的研究を用いる。参加者は、知的障害を受けた子どもを養育する母親4名である。母親の年齢は50代後半から70代半で、平均年齢は67.3歳であった。母親たちは子どもの幼児期から小学生時期にセルフヘルプ・グループの会の結成に関わった仲間である。現在は、親睦会としてつながっている。知的障害を受けた子どもの年齢は30代前半から40代前半で、平均年齢は37.0歳で、男子1名、女子3名であった。面接時間は、一回最長210分～90分の範囲で実施し、了解のもとに全員録音をした。面接回数は1～2回であったが、補足の情報収集のために電話も使用し、裏づける母親の記録物や文集、会報も参考にした。本学の倫理委員会に研究計画書を提出し、平成14年10月29日に承認を得た(受付番号14-29)。</p> <p>結果：分析の単位である文脈は787に分けられ、コードは720で、使用したコードは397となった。知的障害を受けた子どもを長期養育する母親と家族や仲間・周りとの関係性を構成する要素として、【血縁(婚家・実家)】【障害の子ども(きょうだい)】【夫】【自己(母親自身)】【障害の子ども】【仲間・周り】6つの視座から分析した。抽出された15のカテゴリーは、[婚家・実家から関わりを嫌がられる]、[実家から養育責任が果たせなくなることを心配される]、[子どもの養育が精一杯できょうだいに関われない]、[子どもと関わらなかった夫と話し合えない]、[悩みながら子どもと関わろうとする夫と気持ちが通う]、[子どもを受け入れられない]、[子どもの養育方法や場を探す]、[“子どもは親だけでは養育出来ない”と知る]、[子どもが周りを変える力になっていることに気づく]、[婚家・実家への意識的な関わりで子どもの見方を変えさせる]、[きょうだいに家族としての自覚が生まれる]、[夫婦間で考え方の違いを認め合う]、[子どもが自分を変える]、[悩みながら長期養育の中で子どもの力を引き出す]、[セルフヘルプ・グループの会や仲間・周りの支えの中で家族も共に育つ]であった。サブカテゴリーは45個であった。</p> <p>考察：母親と6つの関係性の視座から15カテゴリーが抽出され、その内容は、長期養育の3つの段階に区分された。この3つの段階は、明確に区別される段階として存在しているのではなく、相互に影響し合う関係性を含んでいると考えられる。知的障害の子どもを長期養育する母親は、当初は自己も、子どもの存在を否定して、存在に苦しむ。家族と社会の中で孤立している第一段階。仲間を探し求めて、出会い、学びや活動に積極的に参加し、苦悩を持ちながらエンパワーメントを得て「子どもが周りを変える力になっている」と気づく、母親の大きな転換となる。セルフヘルプ・グループを結成して成長し合う第二段階。血縁、きょうだい、夫、子どもとの問題も存続するが、悩みながら長期養育の中で子どもの力を引き出した養育方法に誇りと満足感を得ている。社会と家族で養育を分かち合う第三段階。それらを経た現在は、中年期の子どもときょうだい間、母親ときょうだい間、高齢の親との間などで、関係性の再構築が行なわれる過程。新たな第四段階があると推測された。</p> <p>総括：今回の研究では、知的障害を受けた子どもを長期養育する母親の体験の一端を、3段階に大別し、明らかにできた。これは、家族と社会で養育の困難さをどのように分かち合うのか、それには、関わりをもつ人たちとの関係性の構築や、養育の社会化が必要であること、又、看護職は長期に渡って支持的な関係性を続けることが必要と示唆された。そして、養育は、社会にとっても価値ある大事業であることを再確認した。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。